甲府市文化財調査報告 12

横根・桜井積石塚古墳群調査報告書II

— 横根支群94・103・104号墳発掘調査報告書 —

2001

甲府市教育委員会

序

積石塚古墳が点在する甲府市東部の横根・桜井両町は、甲斐国分寺の瓦を供給したり土器の生産を行うなど、白鳳時代から平安時代にかけて甲斐国の窯業生産の中心となった重要な地域です。

積石塚古墳については、窯業に従事した工人集団の墳墓とする説も提起されておりますが、古墳の成因についてはまだまだ謎が多く、本格的な解明はこれからの研究の深化を待たなければなりません。

そのため、甲府市教育委員会では積石塚古墳の詳細な分布調査を実施してその位置を記録し、個別にプレートを設置するなど、遺構の保護・保存と啓蒙活動に力を注いできたところでございますが、山林の伐採作業を行う際にいくつかの積石塚に損傷が及ぶという不測の事態が起きてしまいました。

今回の発掘調査は、損傷・破壊の度合いを遺構の残存状況から確認することを目的に実施致しましたが、このようなことが二度と起こらぬよう、大規模な山林伐採への対応方法を関係諸機関と協議し、また、積石塚古墳の存在と保護の必要性をピーアールできるよう、平成11年度には桜井町内の15基を市文化財に指定させていただきました。

総数145基に及ぶ横根・桜井積石塚古墳群は全国でも屈指の規模を誇るものであり、武田氏に関わる史跡・文化財や甲府城跡と同様、本市はもとより山梨県を代表する歴史的文化遺産として位置づけられるものでございますので、その保護と活用につきまして関係各位の一層の御指導と御協力をお願い申し上げます。

平成13年３月

甲府市教育委員会
教育長　金　丸　　晃

例　　言

1．本書は、山梨県甲府市横根町地内（通称「八人山」）に所在する横根・桜井積石塚古墳群横根支群94号墳・同103号墳・同104号墳の遺構確認調査の報告書である。
2．本書にかかる発掘調査は、国・県から補助金の交付を受け、平成９年５月６日～同年７月２日に甲府市教育委員会が実施した。報告書にかかわる主な整理作業は平成12年度に行った。
3．出土遺物の実測・トレースは、内藤真千子、望月秀和が担当した。
4．本書の執筆・編集は、市瀬文彬文化芸術課長を編集責任者とし、平塚洋一が担当した。
5．本書における古墳の空中写真・写真実測は、㈱パスコに委託した。
6．出土した金属製品の保存処理は、㈶帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
7．本書に係る出土遺物及び記録図面・写真等は、甲府市教育委員会で保管している。
8．発掘調査参加者は次のとおりである。
　発 掘 担 当 者　平塚洋一
　発 掘 調 査 員　富永小枝
　発掘調査参加者　坂本しのぶ　小宮通子　金井いく代
　遺物整理参加者　内藤真千子　望月秀和
9．発掘調査から報告書作成に際しては、以下の諸氏、諸機関から多大なる御助言・御配慮を賜った。心より感謝申し上げたい（順不同・敬称略）
　茂木雅博、塩谷　修、森原明廣、瀬田正明、望月和幸、㈶山梨文化財研究所、
　山形県南陽市教育委員会

凡　　例

本書に掲載した遺構図・遺物実測図は以下のとおりである。
1．本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは標高である。
2．挿図第１図には国土地理院発行の１／50,000地形図「甲府」及び「御岳昇仙峡」を使用した。

目　　次

序
例言・凡例
目次
第１章　発掘調査に至る経過…… 1
第２章　遺跡の位置と環境…… 1
第３章　遺構と遺物
　１　横根支群94号墳…… 5
　　①墳丘…… 5
　　②出土遺物…… 5
　２　横根支群102号墳…… 5
　３　横根支群103号墳…… 5
　　①墳丘…… 5
　　②内部施設…… 9
　　③出土遺物…… 9
　４　横根支群104号墳…… 9
第４章　小　括…… 12
第５章　積石塚古墳研究の現状と課題
　１　積石塚古墳の分布と立地…… 12
　２　発見された遺物と年代…… 13
　３　石室の形態について…… 14
　４　環境自生説と被葬者渡来人説について…… 14
　５　周辺遺跡の状況から…… 16
　６　展望と課題…… 17

挿図目次
第１図　横根・桜井積石塚古墳群分布図…… 3
第２図　遺跡位置図…… 4
第３図　横根支群94号墳…… 6
第４図　横根支群94号墳平面図・エレベーション図・トレンチ位置図…… 7
第５図　横根支群103号墳…… 8
第６図　横根支群103号墳平面図・エレベーション図…… 10
第７図　横根支群103号墳石室展開図…… 11
第８図　横根支群104号墳トレンチ調査図…… 11
第９図　横根支群94号墳・103号墳出土及び表面採集遺物…… 13

表目次
第１表　積石塚古墳分布一覧表…… 18

第１章　発掘調査に至る経過

横根・桜井積石塚古墳群は、昭和40年代に山梨県教育委員会が全県下を対象として行った埋蔵文化財包蔵地分布調査によって明らかとなった。昭和58年（1983）に山梨県考古学協会に委託した詳細分布調査の結果、既知分を含め145基が積石塚古墳、またはその可能性があるものとして把握された。また、同年に横根支群39号墳、翌々年（1985）には桜井内山支群９号墳の発掘調査を行い、その構造・成因について解明を図った。

今回の調査は、平成９年に甲府市横根町八人山における樹木の伐採によって、積石塚古墳群の一部が破壊されたことに伴い実施したものである。破損状況は、横根支群94号墳は墳丘の南裾部分（谷側）を削平され、同103号墳は山側から土砂を被り、同104号墳は墳丘そのものを削られてしまう、というものであった。調査は、破損を受けた古墳の清掃と現状の実測調査を目的に実施し、あわせて石室の一部の発掘調査を行った。104号墳については詳細分布調査で古墳か否か判断がつかず、候補として扱っていたものであるが、まとまって存在した礫石が削平されてしまったため、残存状況の確認を目的にトレンチ調査を行った。

なお、平成11年(1999)甲府市教育委員会では、桜井支群の15基を甲府市有形文化財として指定した。

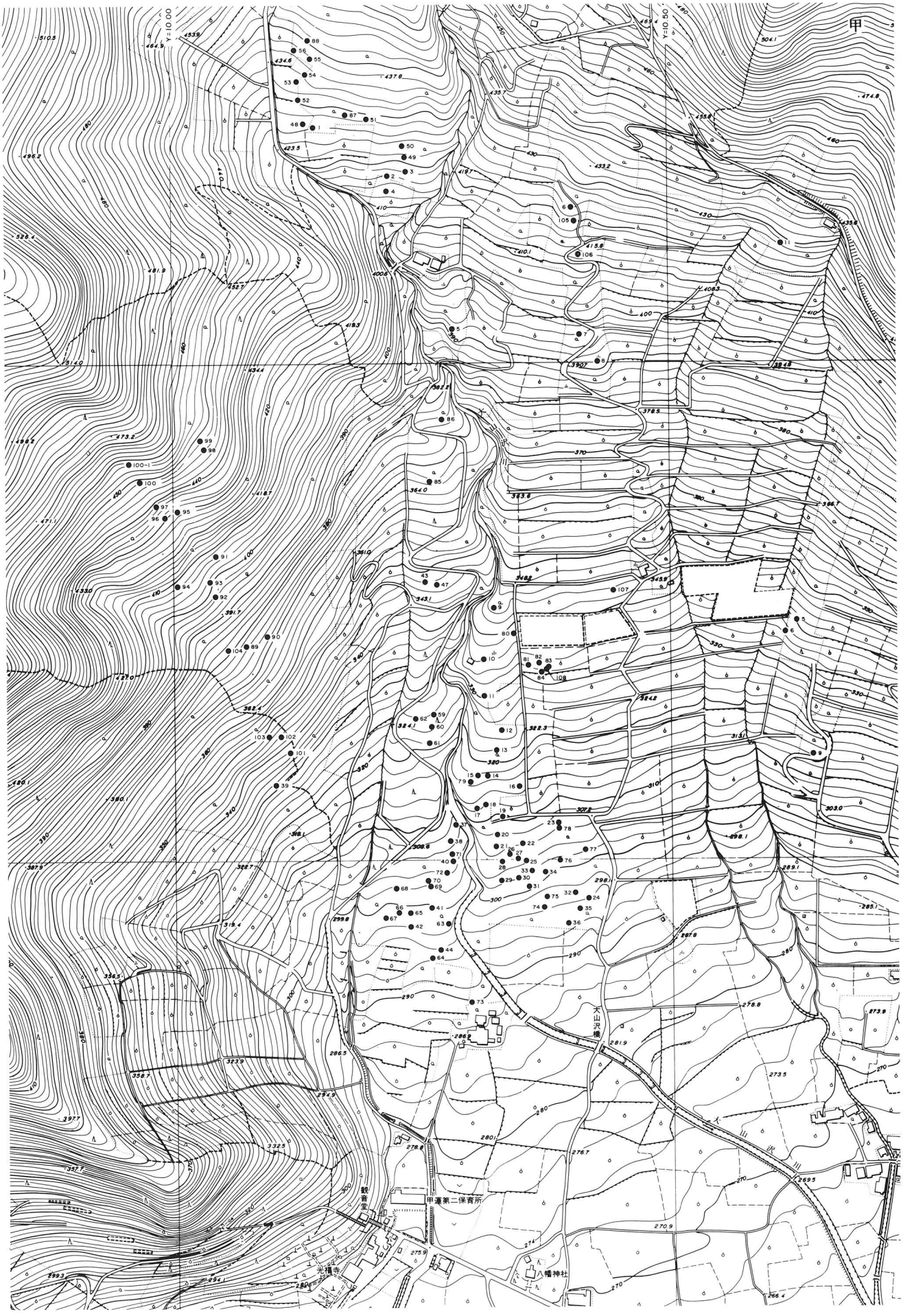
第２章　遺跡の位置と環境

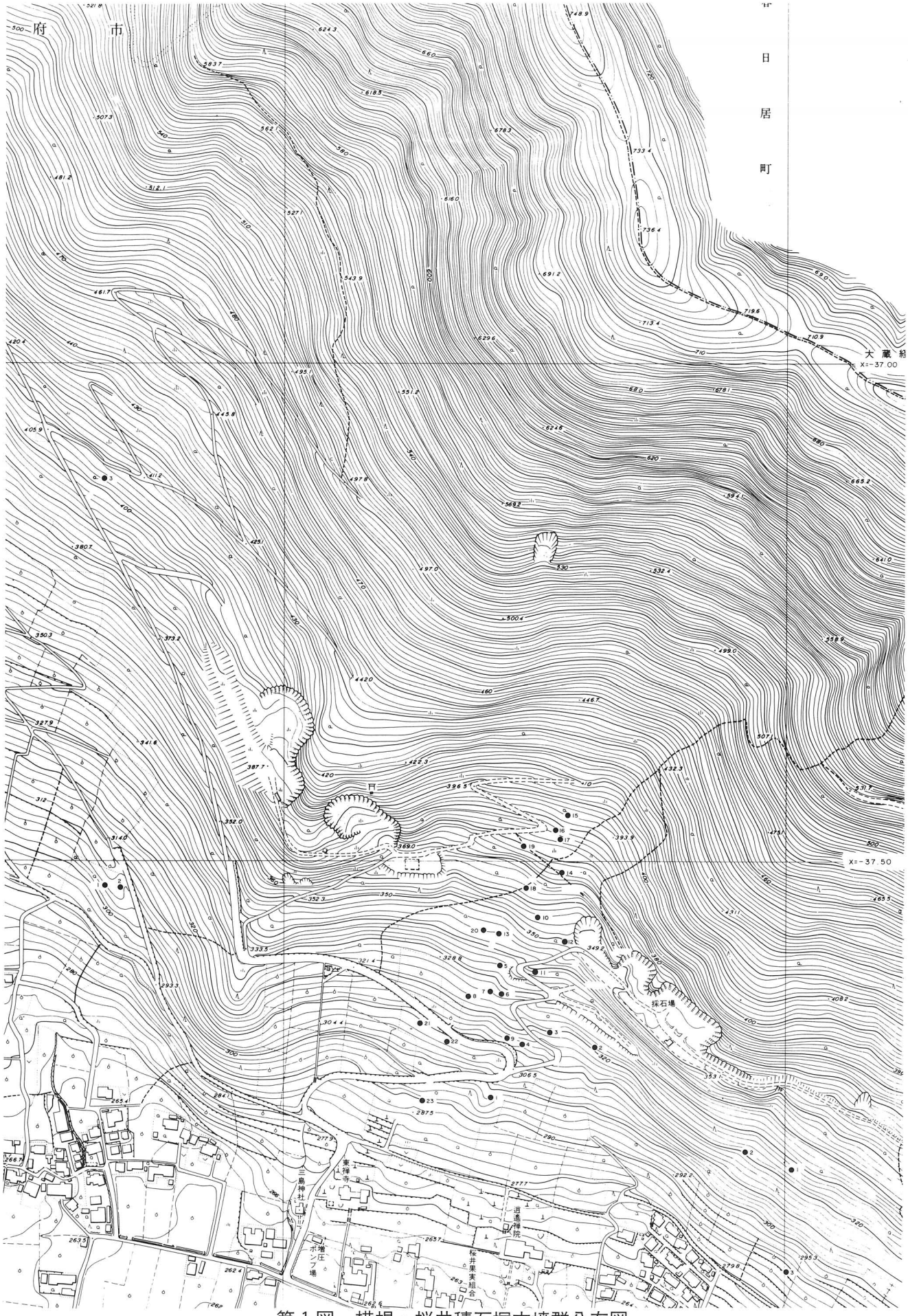
横根・桜井積石塚古墳群は、甲府市横根町八人山山腹から桜井町大蔵経寺山南麓にかけて分布する。八人山の南麓には濁川支流の大山沢川・十郎川が流れ、棚山・大蔵経寺山の麓を笛吹川支流の平等川が南流する。市南部で濁川は笛吹川に合流し、やがて富士川と名前をかえて太平洋にそそぐ。

甲府市横根町・桜井町から東八代郡石和町・東山梨郡春日居町にかけて積石塚古墳が多く分布する。その中でも八人山の南東斜面から大山沢川左岸にかけて密に分布する。横根町から桜井町にかけては総数145基が確認されている。一帯は礫石を積み上げた段々のブドウ畑になっており、その中にも石室が点在することから、開墾の際多くの積石塚古墳が消滅したことが想定できる。

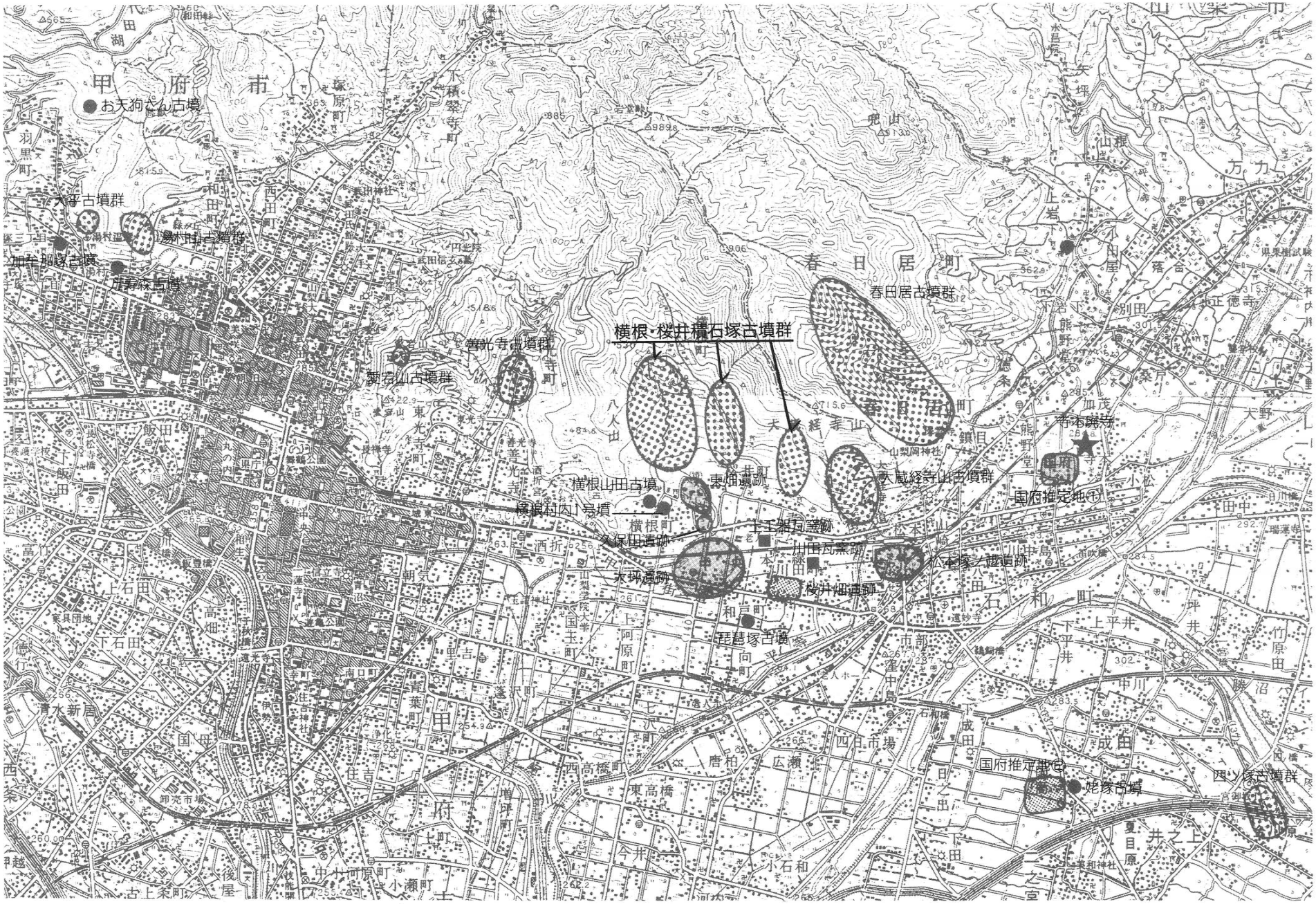
現在の甲府市は、山梨・巨摩両郡のそれぞれ一部を合せた領域であり、和戸町・横根町・桜井町・川田町は、『倭名類聚抄』に記される「山梨郡表門郷」に該当し、山梨県内でも遺跡が数多く所在する地域である。その周辺には古墳時代後期～平安時代の集落遺跡である東畑遺跡、奈良～平安時代にかけて土師器の生産を行った大坪遺跡、法起寺式伽藍配置を持つ春日居町寺本廃寺（白鳳期）に瓦を供給した川田瓦窯跡、一宮町国分寺・国分尼寺（天平期）に瓦を供給した上土器瓦窯跡が知られる。

この地域は、瓦の供給等からも春日居古墳群・寺本廃寺に代表される春日居勢力と密接な結びつきがあったことが推定できる。最近の発掘調査では、東畑遺跡から白鳳時代の製作と思われる金銅仏が出土し、久保田遺跡ではセミを象った金銅製海老錠が出土、前述した大坪遺跡の別の調査地点からは土器と共に大量の木製品や瓦塔が出土するなど、古墳時代から古代にかけての研究者の注目を俄然集めている。


甲
観音堂
甲運第二保育所
光福寺
八幡神社
大山沢橋



第１図　横根・桜井積石塚古墳群分布図



●古墳　古墳群　集落遺跡　★寺院跡　■瓦窯跡

第2図　遺　跡　位　置　図　（S＝1/50,000）

第３章　遺構と遺物

１　横根支群94号墳

①墳丘（第３～５図）

横根支群94号墳は、南傾斜面に立地する直径約９ｍの円墳で、純粋に礫石のみで墳丘が構築されている。調査前は、樹木伐採に伴う落葉や枯木・枯枝に墳丘が覆われ、また伐採した樹木の運搬に伴って造られたブルドーザー用道路により墳丘の谷側が削られた状態であった。清掃を行った結果、主に直径約10cmから長径30cmほどの石で構築された墳丘が確認できた。これらの石は、現地山中に多量に存在する山石であり、石質は輝石安山岩である。墳丘の南側裾の部分は、幅約２ｍにわたって削平されている状況が確認できた。墳丘は明確な外護列石や周隍を伴わず、墳丘と地表との境は判然としない。墳丘は、（斜面上にあるため概数でしかいえないが）墳頂部で周囲より約１ｍ盛り上げてあった。墳丘中心部から斜面鉛直方向に、石室を構成すると思われる６石からなる石列が一列（幅約30cm×長さ約90cm）存在した。その時点での主軸の向きは、富士山など特定の目標物や北頭位などの方位を意識しているのではなく、等高線に対してほぼ直行しているようであった。石室の構造を調査するため、Ｔ字状にトレンチを設定して掘り下げた。最大径40cm程度の石が不規則に入り混むのみで、今回の調査では石室の存在まで確認できなかった。

②出土遺物（第10図）

94号墳からの出土遺物は、墳丘内と墳丘付近のものがある。ともに積石塚古墳の造営に直接かかわった年代のものとは考えにくい。墳丘内出土遺物は、陶磁器である。石室のトレンチ調査の際に検出したものである。染付碗と陶製の急須の把手である。染付碗は、器形や文様などから19世紀後半の肥前系磁器と判断される。

墳丘付近のものは表採であり、土師質土器の細片である。器形など不明であるが胎土から10世紀代の所産と考えられる。

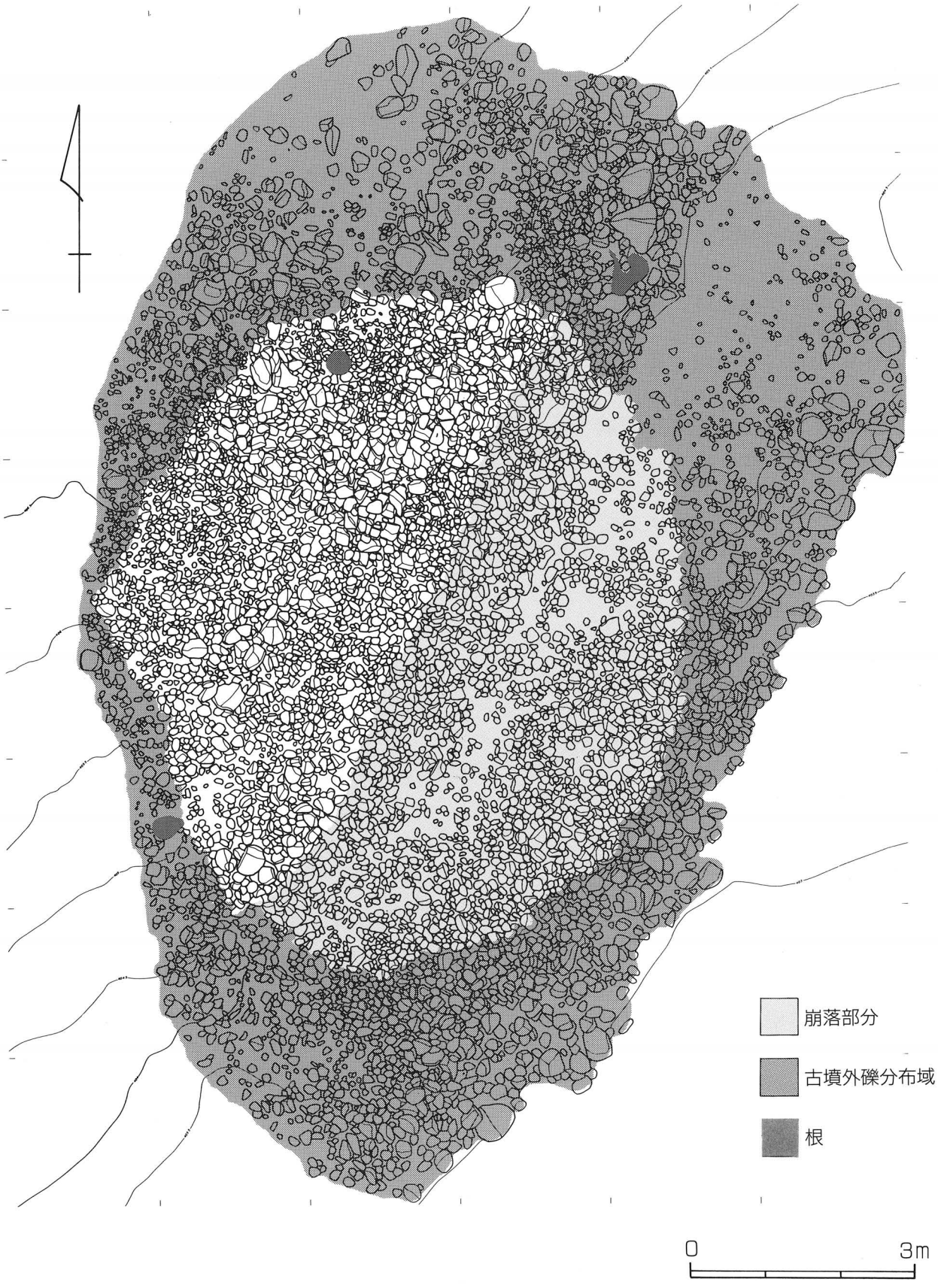
２　横根支群102号墳（写真３）

横根支群102号墳は、103号墳の南東に隣接して築造された積石塚古墳である。今回調査対象には含まれない古墳であったが、103号墳の写真撮影の際周辺をあわせて清掃をした結果、石室が発見された。墳丘の規模は約８ｍ。天井石が５枚確認できたが、今回の調査では墳丘表面の清掃に作業をとどめたため、詳細な石室構造については不明である。

３　横根支群103号墳

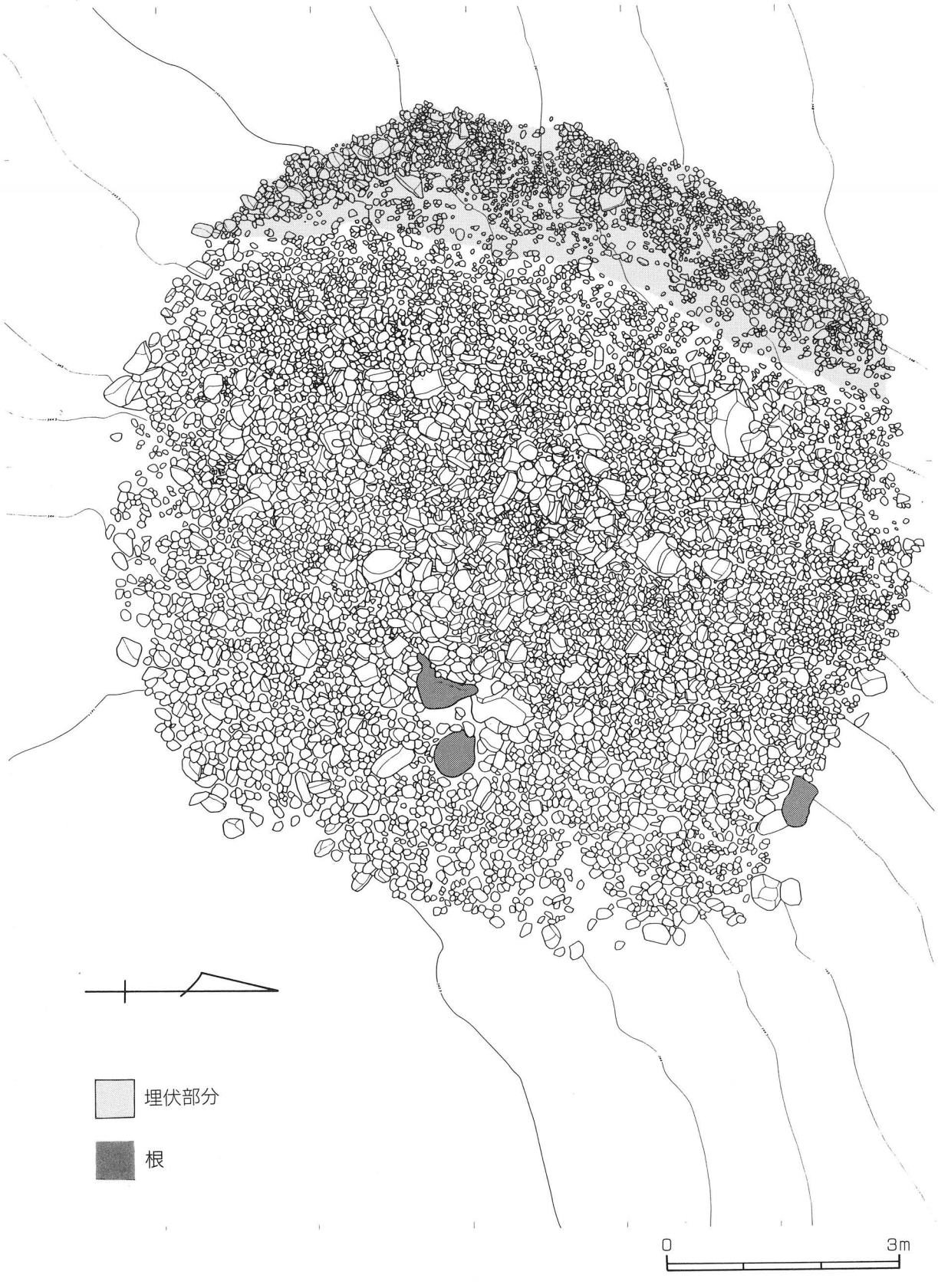
①墳丘（第６～７図）

横根支群103号墳は、南傾斜面に立地する直径約10ｍの円墳で、純粋に礫石のみで構成される積石塚古墳である。調査前には、樹木伐採の際、墳丘の山側裾付近を重機で削平して道を造られた影響で、墳丘は土砂に覆われていた。墳丘の土砂等を除去しながら清掃した結果、主に直径約10cmから長径30cmほどの石で構築された墳丘を検出できた。これらの石は、94号墳と同じく現地山中にある輝石安山岩である。墳丘は明確な外護列石や周隍を伴わないが、礫の集中度合いによって墳丘と地表との境は推定できる。清掃の結果、墳丘の



第３図　横根支群94号墳

第４図　横根支群94号墳平面図・エレベーション図・トレンチ位置図



第５図　横根支群103号墳

中心部分には石室が確認できたが、天井石は残存せず石室が露出していた。石室は墳丘中央部に位置しており、主軸をＮ－45°－Ｅにとる。しかし、この古墳も特定方角を意識して石室を築造したのではなく、斜面に石室を造る都合上等高線に並行して築造したものと考えられる。

②内部施設（第８図）

石室は墳丘中心部にある。天井石は失われ、石室の長辺・短辺の片方ずつしか確認できないが、周囲の古墳の石室構造から、おそらく無袖型横穴式石室である。奥壁（南西壁）と北西側壁は遺存するが、南東側壁と北東壁は攪乱のためか石の積み方が不規則であり判然としない。また、床面についても平坦な面を確認するに至らなかった。規模は、幅45cm・長さ160cm・深さ30cmとやや小振りであった。奥壁は、幅45cm×高さ36cm（床面から）×奥行20cmの一枚岩を立てて用いている。側壁は墳丘同様輝石安山岩を用い、２～３段を積み上げる。上段は小口積みを基調とするが、下段は横口積みにしている状況が看取できる。石の大きさは30cm前後のものを主体としており、隙間に小石を充填させ安定させるよう構築している。床面は、土砂除去後の状態では人為的な平坦面が認められなかった。確認面からさらに掘り下げたが、平石などを人工的に敷いた床面を検出できないまま地山の礫層に達した。側壁も確認面より下には小石が不規則にならび、人為的に積んだ様子は認められなかった。

③出土遺物（第９図）

103号墳からの出土遺物は、石室内から刀子が１点出土している。奥壁から65cmの位置から刀子が検出された。検出されたのは、石室を当初確認した面である。刀身は残存しているが中茎の途中で欠損している。現存長は６cmほどである。

他に遺物は出土せず、古墳の築造年代等を決定するまでには至らなかった。

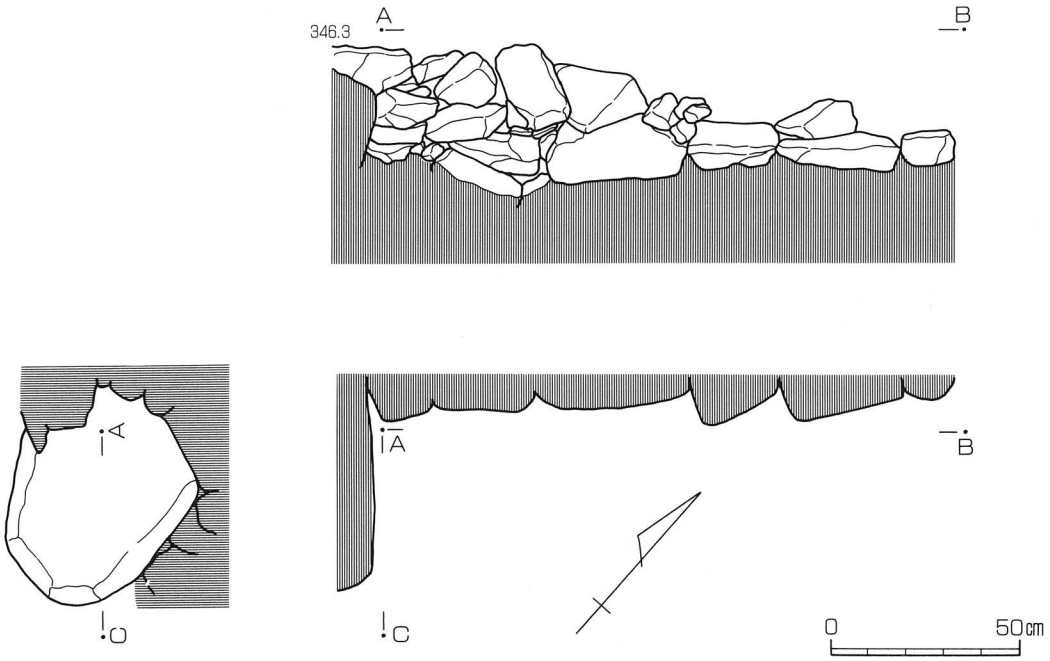
4　横根支群104号墳（第８図）

横根支群104号墳は、樹木運搬用ケーブルの真下にあったものと思われる。ケーブルの下は樹木を引きずり下したため、周囲よりも一段低くなっており、104号墳は調査に入る段階で既にその所在が確認できなかった。そのため、周囲の古墳からおよその位置を測り出し、墳丘があったと思われる所にトレンチを設定し、調査を行った。

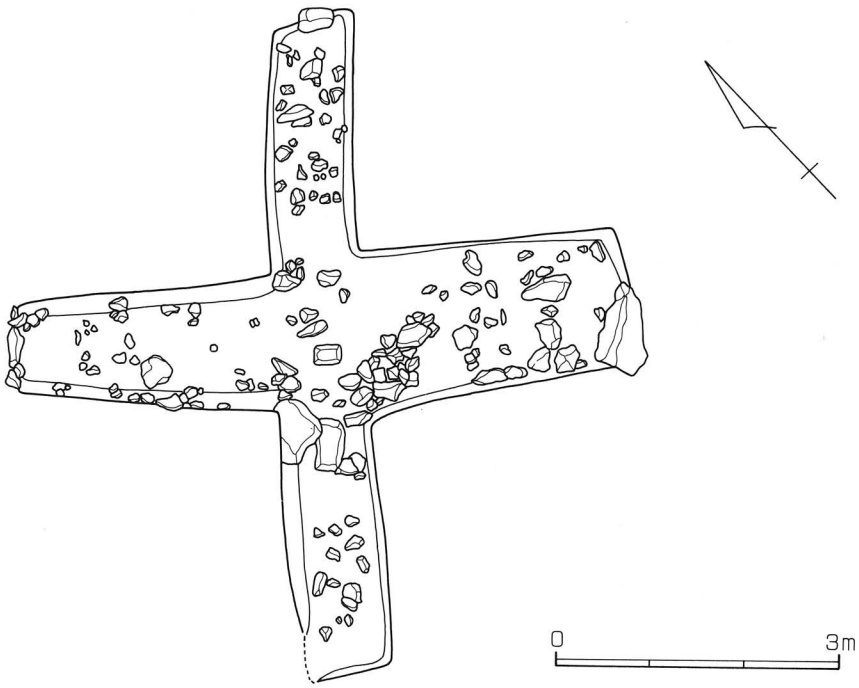
分布調査時において、積石塚古墳の保護を目的に「可能性のあるもの」も積石塚古墳として認定してきた経緯がある。なかでも104号墳は石室の存在が確認できず、積石塚古墳かどうか疑問視されていた。

調査の結果、墳丘はもちろん墳丘構築以前に行われた地山の削り出し、外護列石や周隍なども検出できなかった。また、遺物も全く検出されなかったため、そこに古墳が存在したかどうか判断はできない。

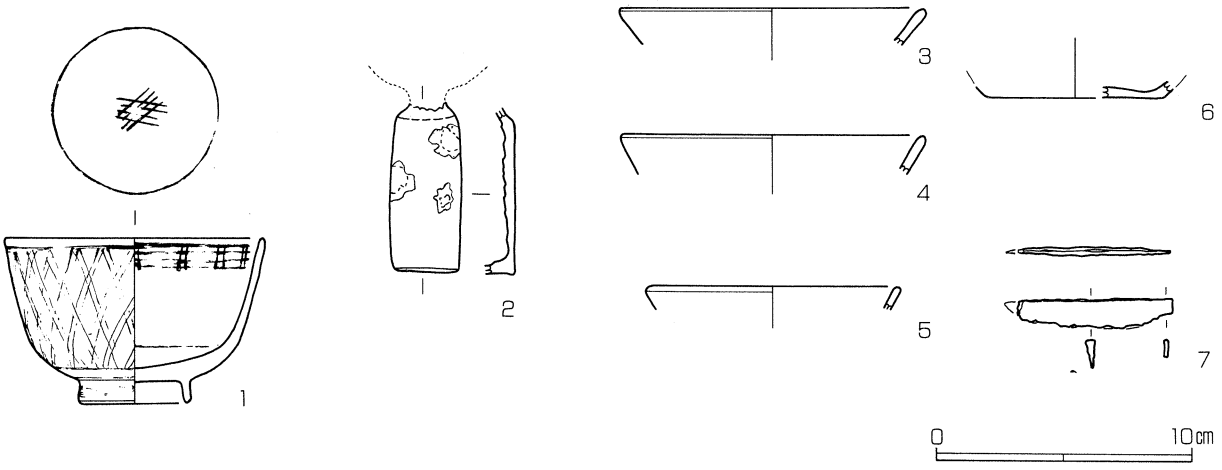
第 6 図　横根支群103号墳平面図・エレベーション図



第７図　横根支群103号墳石室展開図



第８図　横根支群104号墳トレンチ調査図



第９図　横根支群94号墳・103号墳出土及び表面採集遺物

第４章　小　　括

山梨県における積石塚古墳の発掘調査は、春日居町笹原塚支群笹原塚３号墳、石和町大蔵経寺山裏支群15号墳、横根支群39号墳、桜井内山支群９号墳に続き５例目である。

積石塚古墳には、香川県石清尾山古墳群・長野県大室古墳群が有名であるが、山梨県においても現在知られている総数では170基余りをかぞえる。

横根桜井積石塚古墳群は、現在の総数は前述のとおり145基をかぞえるが、埋葬主体部が不明なもので石の集中状況から積石塚の可能性のあるものについても、保護保存の目的から積石塚古墳として認定してきた。今回調査を行った94号墳・102号墳・103号墳・104号墳のいずれもが石室の存在が不明なまま積石塚古墳として認定されてきたものである。そんな中で102号墳・103号墳の石室が確認できたことは成果といえよう。

第５章　積石塚古墳研究の現状と課題

近年、静岡県浜北市内野二本ヶ谷積石塚古墳群・群馬県高崎市剣崎長瀞西遺跡など、近県においても発掘調査事例が増加している。

積石塚古墳の定義と分類については、笠井新也氏が提示した石のみで築いた「純粋な石塚」と土砂を半混合して用いる「半石塚」との大別（笠井1917）、栗林紀道氏が行った純粋な石塚、内部が土で外表が石のもの、内部が石で外が土で覆われているもの、石と土が混ざっているものの４分類（栗林1952）、斎藤忠氏の、土石混合墳は広義では積石塚に属するが純粋な積石塚とは区別すべき、といった意見（斎藤1968）が出されている。最近では飯島徹也氏が精力的な分類を試みている（飯島1999）が、礫石のみで築かれたものと土石混合で築かれたものとの境には未だに明確に線を引くことは困難である。見かけ上は礫石のみであっても土が流出した結果そうなったのか、それとも最初から礫石のみで構築されたのか、を判断する材料が乏しいからである。

1　積石塚古墳の分布と立地

山梨県内の積石塚古墳は、盆地北縁の山裾部分、特に古代に山梨郡と呼ばれた地域に集中する。甲府市東部の横根・桜井地区に145基と最も集中するが、市内西部の羽黒・湯村地区に２基、隣接する石和町に19基・春日居町に14基と連続して分布している。甲府盆地北縁以外では過去、南巨摩郡増穂町馬門付近に２基、東八代郡豊富村と同郡境川村藤垈に１基、東八代郡御坂町井之上に１基、金川原地区・下黒駒長田にもそれぞれ３基、東八代石和町小石和の高田塚古墳１基、北都留郡上野原町鶴川上の山に１基の存在が報告されているが、現在その存在が確認できない。

所在が確認されている積石塚古墳のほとんどが群集傾向にあり、まとまった支群を形成している。ただし、例外的に独立墳も存在している。甲府市羽黒町にあるお天狗さん古墳・石和町鞍掛塚古墳・春日居町朝日塚古墳である。上記の古墳は、山頂や張り出し尾根の突端などに位置し、標高300～450ｍの山腹に他の積石塚古墳のほとんどが分布するのに対し、前記の独立墳の標高はそれぞれ493ｍ、400ｍ、780ｍであり、いずれも立地する山の中でもかなり高い位置に占地している。

甲府市横根・桜井地区には、純粋に礫石のみで構成される積石塚古墳群の他に、横根山田古墳・横根村内１号墳・同２号墳の土盛古墳群の両者が存在する。両者の立地は、土盛古墳が標高276ｍまでの緩傾斜に所在するのに対し、積石塚古墳は標高290ｍ以上の傾斜の急な斜面に占地することから、土盛古墳は山裾の平坦地に築かれ、積石塚古墳は標高の高く傾斜の急な山腹に築かれる傾向を指摘することができる。ただし例外的に、桜井支群24号墳（別名「天王社古墳」）だけは標高420ｍ付近に所在するが、土盛古墳である。

墳丘規模において、その差は明確ではない。土盛古墳中最大規模の横根山田古墳の墳丘規模が直径23.5ｍ以上であるのに対し、積石塚古墳は最大規模の横根支群45号墳の墳丘規模が直径20.0ｍほどであり、大きな相違は認められない。

調査をした際の所見であり科学的な根拠はないが、積石塚古墳の集中する場所は同じ山の斜面の中でも、特に礫が集中的に散布する場所に積石塚古墳も集中する傾向があることが強く感じられた。南～南東を向く斜面に横根支群のほとんどが集中するが、そこには墳丘構築材となる礫が多量に散布している。しかし、東向きの斜面には礫が少なく、土が露出しているが、積石塚古墳も通常の盛土古墳も存在しない。同じ山の斜面の中でも礫の多く散布する地域を選択して古墳が築かれた傾向があるといえる。このことから墳丘構築材として、土の入手が困難だったため礫石を用いたのではなく、当初から礫石で墳丘を構築する目的で場所を選択した状況が窺える。

2　発見された遺物と年代

山梨県内の積石塚古墳の表面採集遺物は、石和町七ツ石支群中の古墳より馬具・直刀・鉄鏃、桜井Ｂ号墳から珠文鏡・瑪瑙製勾玉。横根支群24号墳・同42号墳・同47号墳・同73号墳・桜井支群24号墳・桜井東支群１号墳・同３号墳から須恵器片がある。また発掘調査によって出土した遺物には、笹原塚３号墳から鉄鏃、大蔵経寺15号墳からは土師器・鉄鏃・金環・玉類。横根支群39号墳から土師器片・鉄鏃・刀子・ガラス玉・馬の上顎骨、桜井内山支群９号墳から金環・土師器片・須恵器片・獣骨・人骨が出土している。

珠文鏡は内区に珠文が一列巡るものであり、小林三郎氏分類のＡ類に該当する。勾玉はコの字形ではなくＣ字形を呈する。上記２点から橋本博文氏は、積石塚古墳の出現が５世紀代にさかのぼることを指摘している（橋本1984）。

桜井Ｂ号墳出土とされる珠文鏡と同様の小林分類Ａ類珠文鏡が、山梨県内においてもう一例出土している。甲府市伊勢町遺跡であり、昭和34年（1959）下水道路工事の際偶然出土したものである。伴出遺物に４世紀後半から５世紀後半にかけての土師器があり、なかでも５世紀後半のものが圧倒的に多いことが報告されている。このことより、桜井Ｂ号墳の築造年代が５世紀代後半であることの蓋然性が高いといえよう。

横根支群39号墳及び桜井内山支群９号墳の発掘調査によって出土した土師器・須恵器に、山梨県内の土器編年より６世紀後半から７世紀中葉という年代が付与され、現在では横根・桜井積石塚古墳群の多くが古墳時代後期（６世紀後半～７世紀後半）にかけて築造されたものと考えられている。

3　石室の形態について

古墳時代の大きな転機として、主体部である石室の構造が竪穴式石室から横穴式石室へ変化することが汎日本的な現象として知られている。横根・桜井積石塚古墳群においては、横穴式石室の本来的な目的である複次埋葬ができないようなものが多数存在する。

甲府盆地において６世紀後半から７世紀にかけて築造された群集墳として一宮町千米寺・石古墳群、同町国分古墳群、同町四ツ塚古墳群、御坂町長田古墳群、竜王町赤坂台古墳群があげられるが、いずれの古墳群も横穴式石室を有し、その石室規模は横根・桜井積石塚古墳に見られる全長３ｍ以下・幅１ｍ以下の規模のものから、石室全長9.5ｍを数えるものまでが分布する。

横穴系竪穴式石室とは、竪穴系横口式石室（例えば福岡県老司古墳等）のような九州玄界灘にみられる竪穴式石室から横穴式石室への移行期の石室構造とは異なり、古墳時代の終末期に現れる横穴式石室の衰退した形態として一般的に考えられている。

今回の調査によって新たに103号墳が横穴式石室であることが判明したため、横根・桜井積石塚古墳群では、145基中19基が竪穴式石室、65基が横穴式石室と確認された。坂本美夫氏は、山梨県における横穴式石室導入時期を土盛古墳と積石塚古墳で同時期（６世紀前半）であったと推定し、その変遷を無袖型横穴式石室→両袖型横穴式石室→片袖型横穴式石室と捉えた（坂本1986）。

しかし橋本氏は、横根・桜井積石塚古墳群の場合、一部の竪穴式石室は横穴式石室に先行するものの、その多くは横穴式石室が廃れた後に導入されたもの、と捉えている（橋本前掲論文）。宮澤公雄氏も規模が小さな横穴式石室は、複次埋葬が行われたとは考えずらく、横穴式石室の退化形式であり、複次埋葬から単次埋葬への移行期に構築されたもの、としている（宮澤1991）。

石室の形状から、石室の天井部が「窮隆式横穴石室」あるいは「持ち送り天井」になっているもの、石室の平面形が「胴張型」もしくは「胴張傾向」を示すものが、「大陸の影響を受けた」石室形態と指摘されている。横根・桜井積石塚古墳の場合も、145基中６基が胴張型石室として指摘されている。石室の形状のみで「大陸の影響を受けた」との判断は性急すぎ、むしろ直線状に石を積むよりも、ある程度湾曲させて積んだ方が石積みとして安定する、という意見もある。出土遺物や周囲に所在する遺跡の性格等をふまえた上で総合的に判断すべきである。

4　環境自生説と被葬者渡来人説について

積石塚古墳の成立について環境自生説と被葬者渡来人説の２説がある。被葬者渡来人説

の論拠は朝鮮半島の墓制に類例がみられることより、その被葬者に渡来人を想定するものである。環境自生説は山や山麓に築く場合、周囲に土がなくその入手が困難なため、土の代わりに墳丘構築材として石を用いた、という点を論拠としている。

『魏書』東夷伝中の倭人条に「封土作冢」とあり、対照的に高句麗条に「積石為封」とある。朝鮮半島における積石塚古墳の築造は、紀元前一世紀頃の高句麗の都である桓仁の周辺や、紀元後初頭、鴨緑江中流域の通溝平野に遷都した輯安の周辺に特に集中する。分布の南限は漢江流域まで認められ、四世紀とされる石村洞4号墳がその例として挙げられている。427年に平壌に遷都してから後は、石室封土墳に移行し、5世紀以後積石塚は築造されなかった、と考えられている。

近年、朝鮮半島において前方後円形の積石塚古墳が発見され、日本の前方後円墳の起源について大きな話題となった。高句麗の墓制である積石塚が日本の古墳に対して影響を与えたかどうか、という問題は、積石塚古墳の起源とも大きく関わる問題である。ただし、現在は朝鮮半島における「古墳」の編年的位置付けへの見極めについて静観することが良いのではなかろうか。

高句麗からの日本への移住は、唐に滅ぼされることになる7世紀中頃に多く行われている。その頃、朝鮮半島においてはすでに積石塚が造られなくなっていることから、渡来してきた高句麗人が築造したとする説は疑問視されている。ただし、一部については石室構造・出土品から渡来人とむすびつける考察もある。

特に積石塚古墳と渡来人との関係が取り上げられた長野県大室古墳群では、合掌式石室という特異な石室構造と、周辺に牧の存在がうかがえることなどからおおいに論じられてきた。大塚初重氏は、①大室古墳群中の合掌式石室を持つ積石塚古墳が、5世紀中頃、各支群でそれぞれ最初に築かれ、その起源を韓国忠清南道公州市付近の百済墓制に求められることや、②合掌型石棺を有する168号墳から5世紀中頃の須恵器・土師器とともに土馬が出土している点、③ムジナゴーロ第186号墳の横穴式石室前庭部から多くの土師器・須恵器とともに馬頭骨が出土していること等から、『延喜式』に記載される大室牧の成立を5世紀後半代と捉え、そこで馬匹の生産に従事した百済系渡来人と在地の地域社会の人びとをその被装者に推定している（大塚1992）。

翻って甲府盆地では、積石塚古墳の分布は盆地北縁の山裾部分、特に古代に山梨郡と呼ばれた地域に集中し、その石室の形態には竪穴式・横穴式石室の両方が確認されているが、大室古墳群を特徴づけた合掌式石室はみられない。山梨県内で唯一合掌式石室が認められるのは、古代には八代郡沼尾郷と呼ばれた地域にある土盛墳の豊富村大塚古墳である。

坂本氏は、①礫の露出がみられ土よりも礫の入手が安易なこと、②朝鮮半島のそれとは構築方法・形態が相違すること、③高句麗に由来する「巨麻郡」には積石塚古墳がほとんど確認されていないこと、④渡来系神社と積石塚古墳との分布が合致しないこと、⑤積石塚古墳の分布する地域には、それが築造される以前から集落遺跡があり、それ以降も前代までとあまり変わらない形態で集落遺跡が存続することの5点より、既存勢力を排除して渡来人が居住した痕跡が認められないと結論し、環境自生説を採っている（坂本1987）。

それに対し橋本氏は、付近に存在する寺本廃寺や国分寺にみられる百済系の瓦（の窯跡）の存在から、百済系渡来人の存在を推定している。また、横根支群39号墳から馬歯が出土したことより馬の殉葬を推定し、その風習が日本にはなく大陸に類例が認められることから、積石塚古墳の被葬者と渡来人との関連を想定している（橋本前掲論文）。

文献上でみる甲斐国における渡来人の存在は、①『続日本紀』霊亀2年（716）の条に駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七国の高麗人1799人を以て武蔵国に遷し、始めて高麗郡を置く」との記述があり、同じく②『続日本紀』延歴8年（789）の条には「甲斐

国山梨郡人外正八位下要部上麻呂等、本姓を改め田井と為す。古爾等玉井と為す。鞠部等大井と為す。解礼等中井と為す。並びに其の情願を以てす。」、③『日本後記』延歴18年（799）の条には「甲斐国の人止弥若虫・久信耳鷹長等一百九十人言わく。己等先祖元是百済人也。聖朝の仰せ慕い、海を航り投化せり。即ち天朝論旨を降し、摂津職に安置せり。後丙寅歳正月廿七日格に依り、更に甲斐国に遷る。爾自り以来、年序既に久しい。去る天平勝宝九歳四月四日敕し伏奉せり、其高麗・百済・新羅等、遠く聖化を慕い、姓を□（給）うを情願せり、悉く聴き許される。己等先祖未だ蕃姓を改めず。伏せ乞うは改姓を蒙る。若虫姓に石川、鷹長等姓広石野を賜う」とある。

関晃氏は①について、上代仮名遣いの研究から「巨麻」の音が「高麗」の音と同じであり「駒」とは異なる点や、この時点で甲斐以外にはコマの名が郡名にまでなっていない点より、この中で甲斐の高句麗人がかなりの数を占めたことを想定し、②から山梨郡の百済系の姓を持つ人が、③から郡名は不明だが同じく多くの百済系の姓を持つ氏族が甲斐国に居住していたことを推定している（関1959）。

①に記載される高句麗系の人びとは巨摩郡に入植したと考えるのが妥当であり、②に記載される百済系の人びとが山梨郡に入植したものと考えられる。そして、その一部は両郡に営まれた瓦窯において瓦生産にも携わったと考えられる。

甲斐・信濃の両国においては、積石塚古墳とその被葬者を渡来人に直接結びつける資料の出土について現時点では報告されていない。

5　周辺遺跡の状況から

横根・桜井積石塚古墳の南側の平坦部分に土器製作遺跡である大坪遺跡が展開し、1996年刊行の『大坪遺跡発掘調査報告書III』では、平成6年度発掘調査における2号竪穴建物跡について、「柱穴らしきピットはみられない。（中略）壁溝内およびその付近には、径10cm前後、深さ10cm前後を測る小ピットがみられ、壁を保護するために細板を埋め込んだ痕跡か板壁の痕跡」（下線は筆者による）としているが、滋賀県大津市穴太遺跡を始め周辺で検出された「大壁造り建物」との類似性が考えられる。山梨県内の遺跡では北巨摩郡大泉村寺所遺跡13号住居・24号住居・25号住居、北巨摩郡須玉町上ノ原遺跡Ｂ—15、16号住居、Ｃ—80号住居等で検出されている。いずれも「大壁住居」の記載はないがその建築方法に類似性が指摘できる。

「大壁住居」とは、建物の外壁部分に溝を巡らせその中に柱を建て、その柱間を覆うように壁がめぐる建物である。大津市周辺では、「大壁住居」の分布と、「竈形代」と呼ばれるミニチュアの竈・甕等が副葬される古墳の分布が近似しており、渡来人の住居・墳墓と推定されている。大津市周辺の「大壁住居」の年代は古墳時代後期の6世紀中ごろから7世紀初めごろであるのに対し、山梨県内で検出された上記の住居跡の推定年代はいずれも9世紀後半から10世紀代である。およそ300年もの時間差が存在する点や、礎石（もしくは礎板）で柱を支えた竪穴住居の壁溝掘り方までを掘りあげた状態での差異の有無などを検討しなければならない。「大壁住居」の追及も今後調査のうえで必要な視点となろう。近江と甲斐を結んだ経路に位置する東海道諸国の調査事例だけでなく、旧巨摩郡地域に偏って検出されていることから信濃をはじめ東山道諸国の調査事例についてもこれから検討すべきであろう。

横根・桜井積石塚古墳群の北東にある春日居古墳群中の狐塚古墳・寺の前古墳からはそれぞれ銅鋺が副葬品として出土しており、権力誇示としての象徴が「古墳」から「仏教」への移行期だったことが窺える。また春日居町には県内で最古の伽藍を配した寺本廃寺が

所在し、その屋根を葺いた瓦を焼成したのが横根・桜井積石塚古墳群に南面する川田瓦窯跡・上土器瓦窯跡である。東山梨郡春日居町および東八代郡石和町松本・山崎と、甲府市横根町・桜井町は現在でこそ行政区分が異なるが、古代においては同じ山梨郡表門郷であったことが判明している。

山梨英和短期大学横根キャンパスの開発にともない、平成6年度に実施した東畑遺跡の発掘調査において、古墳時代後期を中心とした集落跡が検出され、白鳳時代に製作された小金銅仏も出土した。その仏像は美術史的な鑑定によると大陸文化の影響を受けているという。古墳を築造したと推定される集落から白鳳仏が出土した点、近隣の古墳からの銅鋺の出土、さらに白鳳寺院の造営に携わった近隣遺跡の存在等、表門郷においては古墳時代の終末期から古代にかけて中央の権力と密接に結びついた状況が窺える。

6　展望と課題

今回、横根・桜井積石塚古墳群を素材に積石塚古墳について、①分布・立地、②出土遺物、③石室形態、④文献に記載される渡来人、と様々な角度からの検討を試みた。しかし、積石塚古墳の成因解明にまでは至らなかった。

古墳の被葬者（氏族）が特定できたものには、墓誌が出土した太安万侶の例や、近江国滋賀郡における漢人系帰化氏族の例が挙げられる。巨大前方後円墳の被装者に擬せられる諸天皇（大王）の例や、埼玉県下における「胴張型横穴式石室」を持つ古墳を壬生吉志の墓であるとする金井塚氏の論考（金井塚1980）については、推定の域を脱することはできない。また同様に、積石塚古墳の被装者を渡来系氏族と結びつけようとすることも非常に困難な作業である。

先に引用した『日本後記』③の記述より、百済系渡来人は彼の国から直接甲斐国にきたのではなく、摂津国というワンクッションをおいて入国したことがわかる。高句麗系渡来人についても直接入国したのではなく、何処からか大和政権の命令によって甲斐国に入植し、ついで武蔵国に移植したことが推定できる。渡来系の氏族が祖国の習俗に倣って積石塚古墳を造営したというのであれば、入植した地域に積石塚古墳が存在するものと考えたいが、摂津国にも武蔵国高麗郡にも積石塚古墳存在の報告を聞かない。

現在、古墳だけでなく集落遺跡についても、開発に伴い発掘調査が多数行われている。ありきたりではあるが古墳それ自体だけでなく、周辺の集落遺跡における出土遺物等からも共通する要素を抽出することにより、古墳の被葬者若しくはその氏族の解明につながる手がかりが得られるであろう。「大壁住居」もその要素の一つになり得るものと思われる。今後、日本全国への拡散・分布について、詳細に分析されることが望まれる。

第１表　積石塚古墳分布一覧表

古墳(群)名称	総数(積石塚	所在県	所在市町村	墳丘形態・規模	主体部構造	立地	備考
松沢古墳群	2基	山形県	南陽市		竪穴式	急傾斜面	
鏡石古墳		群馬県	利根郡昭和村	円墳	竪穴式		
伊熊古墳			北群馬郡子持村	円	横穴式		
有瀬古墳群	2基		北群馬郡子持村	円	横穴式		
丸小山古墳			北群馬郡子持村	不整形			
田尻古墳			北群馬郡子持村	方墳	横穴式		
稲荷森古墳			群馬郡榛名町	方墳			
谷ッ古墳群	2基		群馬郡箕郷町	方墳	竪穴式		
坂下古墳群	6基		渋川市	方墳	竪穴式		
東町古墳			渋川市	方墳	竪穴式		
空沢古墳群	45基(12基)		渋川市	円墳	横穴式、竪穴式		
剣先長瀞西古墳群	35基(５基)		高崎市	方墳	竪穴式		
諏訪平３号墳			利根郡昭和村	円墳	横穴式		
川瀬原古墳群	13基		利根郡昭和村	方形、不整形			
王山古墳			前橋市	前方後円墳			
瀬戸岡古墳群		東京都	秋川市				
横根・桜井積石塚古墳群	145基	山梨県	甲府市	円墳	横穴式、竪穴式	丘陵～山麓	
お天狗さん古墳			甲府市	円墳		山頂に独立	
湯村山古墳群	9基(１基)		甲府市	円墳	横穴式	丘陵～山麓	土石混合墳
大蔵経寺山古墳群	19基		石和町	円墳	横穴式	丘陵～山麓	３基は消滅
春日居古墳群	41基(12基)		春日居町	円墳	横穴式	丘陵～山麓	銅鋺の出土もある
新郷１号墳		長野県	大町市	円墳	横穴式		周辺９基が積石塚古墳
岩松院古墳群			小布施町				
長原古墳群	70基近く		長野市				ヤックラを多く含む
大室古墳群	505基		長野市	円墳		山麓	合掌型石室を多く含む
西前山古墳			長野市	円墳			
菅間大塚古墳			長野市	円墳			
竹原笹塚古墳			長野市	円墳			合掌型石室
桑根井空塚			長野市	円墳			合掌型石室
桑根井鎧塚１号墳			長野市	円墳	横穴式		
観音塚古墳			長野市				
安坂将軍塚古墳群	4基(３基)		東筑摩郡坂井村	方墳	竪穴式		
里山辺古墳群	19基(５基)		松本市	円墳	横穴式、竪穴式		
二本ヶ谷積石塚古墳群	28基	静岡県	浜北市	方墳、不整形		谷地	
辺田平古墳群14号墳			浜北市			台地	
太田坊古墳群６号墳			浜北市			台地	
瓦屋西Ｃ古墳群27号墳			浜松市	円墳		台地	
千人塚平Ｃ古墳群13号墳			浜松市			台地	
愛野向山Ｂ古墳群26号墳			袋井市	方墳		丘陵	
天神山古墳群(３号墳)	3基(１基)		湖西市	円墳	横穴式	丘陵	
旗頭山尾根古墳群	40基	愛知県	一宮町			尾根	盛土墳と混在
城山古墳群			一宮町	円墳		丘陵	
向山古墳群	3基		一宮町	円墳		丘陵	
フウキ古墳群	2基		一宮町			山麓	
常光寺古墳群４号墳			一宮町			丘陵	
大入山古墳群	10基		新城市			尾根	
向山古墳群	3基		新城市			尾根	
吉祥古墳群	12基		豊橋市			尾根	盛土墳と混在
上寒之谷１号墳			豊橋市			尾根	
荒木古墳群(15号墳)	16基(１基)		豊橋市	円墳	竪穴式	尾根	
北山１号墳			豊橋市			尾根	
正家積石塚墳		岐阜県	恵那市				南山大調査
美佐野積石塚古墳群	10基		鹿児群御嵩町			山腹	
不動洞１号墳			鹿児群御嵩町			谷地	
虎渓山４号墳			多治見市			谷地	
ジーコンボ古墳群		山口県	萩市				
うのべ山古墳		香川県	大川郡津田町				
野田院古墳群		香川県	善通寺市	前方後円墳系	竪穴式	山頂	３世紀後半
ハカリゴーロ古墳			坂出市	前方後円墳系			
石瀬尾山古墳群			高松市	前方後円墳、双方中円墳他			
丹田古墳	99基	徳島県	三加茂町		竪穴式、竪穴系横口式		
萩原１号墳			鳴門市				
曲崎古墳群		長崎県	長崎市				
相島古墳群	250基以上	福岡県	新宮町			海岸	

日本国内で確認されている積石塚古墳を第１表にまとめた。この表の作成にあたっては、『積石塚古墳』(山梨県考古学協会1999)、「東海の積石塚古墳」(岩原剛1999)、『南陽市史　上巻』(南陽市1990)、及びweb上で「積石塚古墳」及び「積石塚」を検索した結果による。ただし、ここでは純粋に礫石のみで築かれたものと、土石混合で築かれた物との区別はしていない。

引用・参考文献

関　　晃　1959　「甲斐の帰化人」『甲斐史学』第７号　甲斐史学会
斎藤　忠　1964　「積石塚考」『信濃』第16巻第５号　信濃史学会
磯貝正義　1965　「甲斐の古代氏族について」『甲斐史学』特集号　甲斐史学会
水野正好　1970　「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第４冊　滋賀県教育委員会
金　廷鶴　1972　『韓国の考古学』　河出書房
小林秀夫　1978　「合掌形石室の諸問題」『中部高地の考古学』長野県考古学会
金井塚良一　1980　『古代東国史の研究』埼玉新聞社
山崎信二　1983　「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『文化財論叢』同朋舎
磯貝正義　1984　「古代の甲府―青沼・表門二郷を中心として―」『甲府市史研究』創刊号　甲府市
橋本博文　1984　「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地―その歴史と地域性』雄山閣
坂本美夫　1986　「大蔵経寺山無名墳の提起する問題」『山梨考古学論集Ⅰ』山梨県考古学協会
坂本美夫　1987　「先史時代・古墳時代」『春日居町誌』春日居町
桐原　健　1989　『積石塚と渡来人』東京大学出版会
末木　健　1990　「甲斐仏教文化成立」『研究紀要』３　山梨県埋蔵文化財センター
土生田純之　1991　「研究法の検討」『日本横穴式石室の系譜』学生社
宮澤公雄　1991　「山梨県における積石塚の分布と研究の現状」『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』甲府市教育委員会
全　浩天　1991　『前方後円墳の源流』未来社
大塚初重　1992　「東国の積石塚古墳とその被葬者」『国立歴史民俗博物館研究報告』44　国立歴史民俗博物館
大塚初重他　1993　『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』東京堂出版
林　博通　1997　「大壁造り建物」の発見・経緯・問題点」『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会
定森秀夫　1999　『陶質土器からみた東日本と朝鮮』『青丘学術論集』第15集　韓国文化研究振興財団
岩原　剛　1998　「東海の積石塚古墳」『三河考古』第11号　三河考古学談話会
飯島哲也　1999　「科野の積石塚古墳」、『東国の積石塚古墳』山梨県考古学協会
黒田　晃　1999　「群馬県高崎市剣崎長瀞遺跡の調査」　同上
橋本博文　1999　「上野の積石塚再論」　同上
大塚初重　1999　「馬とのかかわりを埋葬例からみる」『図説　古墳研究最前線』新人物往来社
黒田　晃　1999　「積石塚は渡来系の墓か」　同上
大塚初重　1999　「長野県大室古墳群」『季刊考古学』第68号　雄山閣
『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』1970　大室古墳群調査会
『笹原３号墳―積石塚の調査―』1979　春日居町教育委員会
『大蔵経寺山15号墳―積石塚古墳の発掘調査報告書―』1984　石和町教育委員会・山梨学院大学考古学研究会
『桜井畑遺跡Ａ・Ｃ地区』1990　山梨県教育委員会

『横根・桜井積石塚古墳群調査報告書』1991　甲府教育委員会
『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』1993　東京堂出版
『山梨県の地名』1995　平凡社
『大坪遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1996　甲府市遺跡調査会
『相島積石塚群』1998　新宮町教育委員会
『内野古墳群』2000　浜北市教育委員会
『平林２号墳』2000　山梨県教育委員会

写真１　調査区遠景（右上に94号墳、左下に102、103号墳）

写真２　94　　号　　墳

写真3　102　号　墳

写真4　103　号　墳

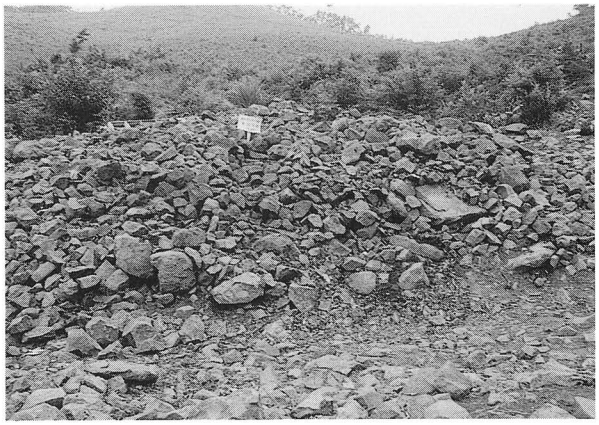


写真５　94号墳

写真６　103号墳　石室

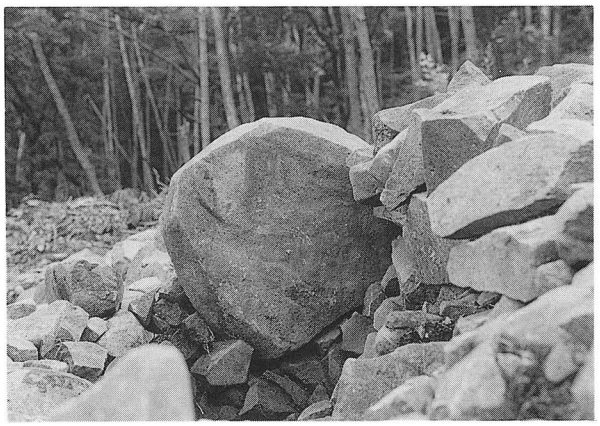


写真７　103号墳石室奥壁

写真８　103号墳　刀子出土状況

写真９　104号墳トレンチ調査

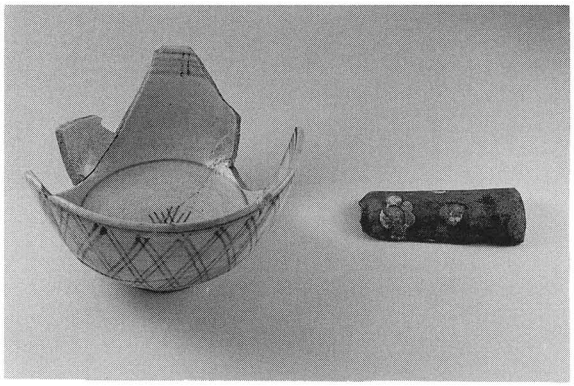


写真10　94号墳出土遺物

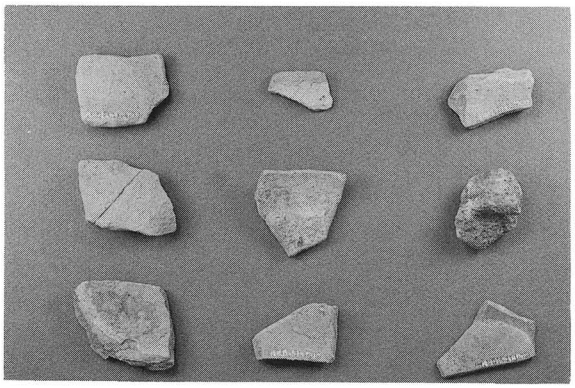


写真11　94号墳周辺表採遺物

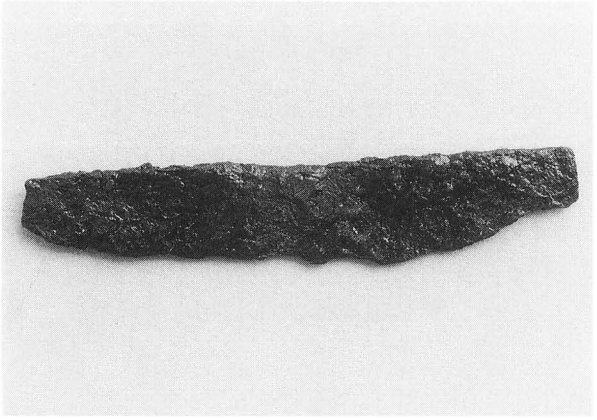


写真12　103号墳出土刀子

報　告　書　抄　録

ふりがな	よこね・さくらいつみいしづかこふんぐんちょうさほうこくしょ
書名	横根・桜井積石塚古墳群調査報告書
副書名	横根支群94号墳・同103号墳・同104号墳発掘調査報告書
巻次	II
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	12
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成13年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積
横根・桜井積石塚古墳古墳群 横根支群94号墳・同103号墳・同104号墳	やまなしけん 山梨県 こうふし 甲府市 よこねちょう 横根町	19201	103-94 103-103 103-104	35° 40′ 30″	138° 36′ 70″	19970506 ～ 19970702 約300m²

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横根・桜井積石塚古墳群	古墳	古墳時代	石室・石列	土器、刀子	

甲府市文化財調査報告12

横根・桜井積石塚古墳群調査報告書II

―横根支群94・103・104号墳発掘調査報告書―

平成13年３月30日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号
TEL ０５５（２２３）７３２４
FAX ０５５（２２６）４８８９

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18